

聖書:列王記第二13章14~25節

説教:契約のゆえに、彼らを恵み

はじめに

いつものように前回までのあらすじをおさらいしてから今日の箇所に入ります。今からおよそ二千八百年前、北イスラエル王国のエフーが10代目の王となった時、彼はバアルと呼ばれる異教の神々を徹底的に破壊し、宗教改革を断行します。これをご覧になった主は、「あなたはわたしの目になかったことをよくやり遂げた」とお語りになり、高く評価される。しかしエフーすべてうまくやれたわけではない。初代の王であったヤロブアムがつくった金の子牛がまだ残っていて、エフーはそれが罪であることを知りながら何もしなかった。それで結局、エフーは主の律法に歩もうと心がけなかったと言われてしまいます。それから代が変わり息子のエホアハズが王となっても、やはり父親と同じようにヤロブアムの罪を犯し続け、主の怒りがイスラエルに向けて燃え上がる。それで北隣にあるアラム王国がたびたび侵略してきて、国がどんどん力を失っていく。これにたまりかねたエホアハズが主に祈ると、主は一人の救う人を与えてくださり、イスラエルは助かった。それが前回までのあらすじでした。

今日はその続き、エホアハズの子であるヨアシュが北イスラエルの12代目の王となった時に起きたことが書かれています。

1 預言者エリシャとエフー

14節。「エリシャが死の病をわずらっていたときのことである。イスラエルの王ヨアシュは、彼のところに下って行き、彼の上に泣き伏して、「わが父、わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち」と叫んだ。」

エリシャはまだ若かった時に、先生であるエリヤに見いだされ、エリヤの跡を継いで預言者となり、預言者としては珍しく政治にも深く関わったひとです。彼がしたことの中でも最も大きいことのひとつは、エフーを見いだして北イスラエルの10代目の王としたことでしょう。ですからエフー一家にとってエリシャは大恩人ということになる。それでエリシャが病氣だと聞いて真っ先にお見舞い駆けつけてくる。しかし、駆けつけた理由はそれだけではありません。北イスラエル王国はアラムの国に攻め込まれて厳しい状況にあります。エリシャが

死ぬ前に、このことで何かアドバイスをもらいたい。そんな願いを持ってやって来た。

2 弓と矢によって教える

1) 手を置く

エリシャもそのあたりの事情はわかっている。思い悩むヨアシュをことばだけでなく、弓と矢を使いながら励まそうとします。16節。「エリシャはイスラエルの王に「弓に手をかけなさい」と言ったので、王は手をかけた。すると、エリシャは自分の手を王の手の上に置いた。」

弓と矢と言えば、いまなら弓道とかアーチェリーがあります。どちらもふだん弓を使わない時は、弦(つる)、ストリングははずしておき、弓を射る時になって初めて弦、ストリングを装着するのだそうです。聖書の時代も事情は同じだったようです。「弓に手をかけなさい」と訳しているところは、弓に足をかけて弓をしならせ、弦を張る動作のこと。弦を張るのにはかなり力があるし、注意をしないと顔に当たって怪我をすることもある。そういうときに、エリシャが手を置いた。手を置くという動作は、私たちもときどきします。これから試合に出ようとしている選手がいれば、肩や背中をぼんとたたいて送り出します。私も応援して一緒に戦うから。そんなふうにして励まします。エリシャが手を置いたのは、それ以上です。神の手がヨアシュに添えられている。そのような強いメッセージが込められています。

2) 東側の窓を開けて矢を射る：アラムに対する勝利の矢

ヨアシュはエリシャの指示に従って東の窓を開け、矢を射るとエリシャはこう言う。17節後半。「主の勝利の矢、アラムに対する勝利の矢。あなたはアフエクでアラムを討ち、これを絶ち滅ぼす。」

いまあなたが東の空に向かって放った矢は、決して意味のない矢ではない。あなたを悩ませているアラムに対してあなたは必ず勝利し、彼らを絶ち滅ぼすことができる。そういうのです。

ヨアシュはこれまでアラムの軍隊を押しとどめるために、一生懸命戦ってきました。けれども、父エホアハズのときに兵器が破壊されて、めぼしい武器がほとんど残っていなかった。これではどんな

にがんばっても勝つことができない。それでエリシャと相談しに来たわけです。そうしたら、あなたが放つ矢は完全で、敵を倒すほどの力を帯びている。そう言われた。もう飛び上がるほど嬉しかったはず。

3) 地面を三度打つ：三度打ち破って町を取り返す

エリシャの指導はそれで終わりません。18節。「それからエリシャは、「矢を取りなさい」と言ったので、イスラエルの王は取った。そしてエリシャは王に「それで地面を打ちなさい」と言った。すると彼は三回打ったが、それでやめた。」

さきほど窓の外に向かって矢を放つことは自然なことですからなにも疑問は感じなかった。でも今度は、矢を取ってその矢で地面を打ちなさいと言われる。矢で地面を打ち付けるようなことは普通はしません。ですからヨアシュは戸惑ったと思います。言われたとおりにやるにはやりましたが、三回打って止めた。

4) 激怒するエリシャ

ところが19節です。「神の人は彼に激怒して言った。「あなたは五回も六回も打つべきだった。そうすれば、あなたはアラムを討って、絶ち滅ぼすことになっただろう。しかし、今は三回だけアラムを討つことになる。」」

皆さんどう思いますか。やった後になってから、あなたは間違ったことをしたと言われる。そんなに大切なことなら、最初に言ってくれればと思いますか。これではヨアシュがかわいそうではないか。そう思ってしまう。25節を読むと、確かにヨアシュはアラムの王ベン・ハダドを三度打ち破って、父の代に奪われていた町を取り返しはしました。でもヨアシュが三回ではなくもっと地面を打っていたなら、もっともっと取り戻すことができたことになる。なおさら、最初にそのことを言って欲しかったと思います。エリシャは体調がすぐれないせいもあって機嫌が悪く、それでこんな気まぐれで不公平なことを言ったのか。もちろんそんなはずはない。ではどういうことか。

3 神の恵み

1) 主の目に悪であることを行うヨアシュ

もういちどヨアシュがどのような人であったのか、そこから確認していきましょう。11節です。「彼は主の目に悪であることを行い、イスラエル

に罪を犯させたネバテの子ヤロブアムのすべての罪から離れず、なおそれを行い続けた。」

このイスラエルの王の不信仰のゆえに主が怒りを燃え上がらせ、アラムの王がイスラエルを略奪するようにした。それでヨアシュが苦しむことになり、エリシャの所に相談に来た。そういう流れです。その時どんなことを期待して来たと思いますか。アラムの国とどのように戦えば勝てるか、具体的な戦略について教えてもらおうと思ったでしょうか。でもエリシャは預言者です。彼の所に行ったら必ず信仰の話になるということは、さすがのヨアシュだって心得ています。事実、ヨアシュはなんと言ったか。「わが父、わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち。」これはかつてエリヤが竜巻に乗って天に上げられる時にエリシャが叫んだことばで、あなたには万軍の主がついておられる。そんな意味です。ヨアシュはそれを覚えているのです。

エリシャは、そんなヨアシュの願いに応えようと最後の力を振り絞ります。ヨアシュが弓に弦を張る時には身を起こしてわざわざ手を添える。東の窓を開けて矢を射なさい。これはアラムに対する勝利の矢である。そこまで語ってくれた。

2) 罪を振り返るならば

なぜ主はエリシャの口を通してこのようなすばらしいことを語ってくれるのか。ヨアシュの信仰がすばらしいからですか。その反対です。主の目に悪であることを行っていたのにもかかわらず、そこまで助けてくださると言われる。自分がしてきた罪のことを振り返れば、これは驚きです。そんな資格がない者にこんな大きな恵みを下さる。そう思ったら、やがて感謝に変わるでしょう。

最初、東の窓から空に矢を放ちなさいと言われた時、なんのことかわからなかった。でもそれは、勝利の矢であると言われてハッと気がつくべきだった。そうかきってエリシャが手を置いてくれたのは、主の御手が自分の上にあるというしるしだったのだ。そこに気がつくはず。

そうしたらどうなるか。矢を取って地面を打てと言われて、やはり何の意味か分からない。でも、なにか深いわけがあるに違いない。きっとエリシャが後で教えてくれる。そう信じて、エリシャが止めるまで何度も地面を打ち続ける。今は分からなくても、先のことについて主に期待して待ち続ける。つまりこれが信仰ということです。罪を振り返ることによって信仰が与えられていく。エリシャは

そのようにしてヨアシュの信仰を取り戻させようとした。

ヨアシュはどうしたか。エリシャがアフェクでアラムを討ち、これを断ち滅ぼすと言うのを聞いた時、柵からぼたもちが落ちてきた。「ラッキー」としか思いません。だから矢で地面を打てと言われたときも、主に期待しないので、三度で止めてしまうのです。

エリシャが激怒した理由がこれです。ヨアシュが悔い改めて、主に立ち戻っていく、せっかくのチャンスだったのです。そのために最後の力を振り絞って、主の恵みに気がつくようにと教えた。ところが残念ながらヨアシュは気がつきません。その結果、北イスラエルの人々の苦しみは続くこととなります。エリシャはそれが分かるので激怒するのです。

3) 契約のゆえに

もしそこで聖書が終わっていたら私たちには希望はなかったでしょう。しかし23節があります。

「主は、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約のゆえに、彼らを恵み、あわれみ、顧みて、彼らを滅ぼし尽くすことは望まず、今日まで、御顔を背けて彼らを捨てることはなさらなかった。」

皆さんも契約書を交わしたことがあると思います。そこにはこんなことが書いてあります。甲と乙、どちらかが契約内容に違反した場合は、その時点で契約は解除となり、損害が発生したならその賠償をしなければならない。これが典型的な契約です。

ところが神が私たちとの間に交わされた契約はかなり特殊です。私たちは主の目に悪であることを行い、とっくの昔に契約に違反していて、契約解除されて文句が言えない立場。ところがアブラハム、イサク、ヤコブに交わしてくださった契約は、私たちが罪を犯し続け、契約に違反してもなお、有効であるというのです。ヨアシュが主に立ち返らなくても、主の契約のゆえにイスラエルの民を恵み、あわれみ、顧みてくださるというのです。契約に違反したら賠償金を支払わなければならなかったはず。ところが、それさえも主イエス・キリストが代わりに支払ってくださった。

世界はこれからどうなっていくのだろうと、かつてないほどに人々の不安が募っています。聖書によれば、人の愛は冷たくなり、この世界はどんどん悪くなると書いてあります。それだけなら何の希望もありません。しかし、神の契約は絶対に破られません。これこそが私たちの大きな希望です。イ

エス・キリストの十字架を通して与えてくださった新しい契約によって、私たちはどんな時にも、たとえこの世界があした滅びるのだと言われたとしても、まったく動じることはない。なぜなら主の契約のゆえに、主が顧みてくださるから。永遠のいのちに続く神の御国へと私たちは招かれている。だからこそ、私たちは自分のしてきた罪を振り返り、資格のない者に大きな恵みを注いだ下さる主の御名をあがめたいと願います。